日本の「新書」の形が目指したものとその変遷
―歴史と生産過程から「新書」の存在を読み解く試み―

大　野　　舞*

新書という名の下でひとつのコレクションが創刊されたのは1938年の岩波書店による岩波新書が初めてだが、実は「新書」という言葉はその前から存在し、「新刊」という意味で使われていた。たとえば登張竹風（ドイツ文学者）は1904年に刊行された「修養と読書」において、「新書」という言葉を使っているが、それは修養を得るためには読書をしなければならず、さらに現代についてよりよく知るためには「新書」も読むべきだと言う意味で使用している[1]。

今では新書というのはあくまで「本のサイズ」ではあるが、一貫したテーマとして社会に広く教養を伝えることを目的としているという点も特徴の一つとして挙げられるだろう[2]。特に60年代以降からは多くの出版社が新書レーベルを出すようになり、今日まで20世紀を通して発展を続けてきた。

新書とはまずは新書判と呼ばれる本のサイズ（105×173mm）を指し、200ページ前後が基準となっている[3]。また、フィクションとノンフィクションに大別することができる。出版月報は、ノンフィクションの中に「教養新書」というジャンルがあり、昨今ではこの「教養新書」の内容が細分化し、「アカデミズム系」、「ジャーナリスティック系」、「ノンフィクション読み物系」があるとしている[4]。しかし、具体的に何が「教養新書」なのかという定かな定義はないのが現状だ。例えば吉田昭は1991年の論文[5]において、多くの新書の中でも以下のように定義する新書を大学図書館に入れる新書として定義している。

1. B40判で紙装仮製本であること。
2. 大量生産され廉価であること。
3. 装丁が共通でシリーズ名称をもつこと。
4. 書き下ろしであること。
5. 啓蒙的であるとともに学術的な内容であること。
6. 現代の諸問題や諸学の基礎的事項を主題とすること。

ただしこのような特性を備えた新書はレーベル全体の三分の一でしかないとも述べている。確かに、元々はこのような新書が「教養新書」のイメージだった、というのは興味深い点だが、現在この条件を全て満たすものはほぼない。今日、日本の新書は書店では新書の棚が設置されているほどに定着し、ミリオンセラーが出るようなことも最近まではあった。2018年版出版年鑑の「新書別新刊点数」から新書を出版しているレーベル数をみると、その年に新刊を出したものだけでもB40（新書判）は172レーベルもある。また、「本を生み出す力」の中で佐藤郁哉は新書を学術書の中に位置付けているが、新書の特徴はその生産量に加えて、定期刊行物という側面も持ち合わせている。このような性質があるため、新書は教養と実用の間に位置付けられているとも言えるだろう。

ここで、教養新書と呼ばれる日本の新書の位置付けをフランスと比較をすることで考えてみたい。フランスのク・セ・ジュ文庫は1941年に創刊され、専門的あるいは学術的なテーマを学生のみならず

＊パリ・シテ大学・院生

興味のある一般読者に対して提供するという目的を掲げている。一方で、通常の学術書よりも安価で提供すると言いつつ、日本の新書よりも薄い128ページのク・セ・ジュはそれでも一冊10€する（1500円相当）。新書では『バカの壁』のように一つの作品が大ヒット（ミリオンセラー）することもあるが、この規模で一般世間を騒がすク・セ・ジュ文庫というのはほぼない。第二次世界大戦後から70年代までがク・セ・ジュ文庫がもっとも販売部数を上げた時期と言われ、その頃では30万部を超えるタイトルもあったという。ブルデューのように若い頃にク・セ・ジュ文庫を執筆し、その後大活躍をした学者もいる。しかし、それからは一般的なテーマも出尽くしたということで、ク・セ・ジュ文庫は専門化していき、その結果、いわゆる一般の大衆読者層は離れていった。今日ではよく売れているタイトルでも数年かけて累積販売部数は数万部程度だ。また、2017年の新刊点数で見ると、ク・セ・ジュ文庫は年間およそ30冊だが、たとえば講談社現代新書は49冊、ちくま新書や岩波新書も60冊以上を刊行している[6]。ノンフィクションの新書の新刊数は各レーベルを合計すると年間1200ほどにもなる（中央公論新社主催の「新書大賞」の対象レーベルに限る）。

さらに言えば、岩波新書のモデルとなったのはイギリスの「ペリカン・ブックス」だが、それが一般化して他の出版社が揃って「ペリカン・ブックス」を出し、しかも継続しているというような流れはイギリスにも、そしてフランスにも生まれなかった。

本研究は新書をモノとして捉え直すことを基盤に置くが、本稿ではその考え方と観点について述べ、そこから得られる示唆について検討する。

1. モノとして捉える

岩波新書は1938年に岩波書店より発刊されるが、その刊行の辞において岩波茂雄は自らを「文化建設の一兵卒」と位置付けている。そして新たに創刊される新書の目的は「現代人の現代的教養」であるとし、さらには「我国文化の昂揚に微力を尽さん」と言い、新書を通して日本文化への貢献を目指すことを説いている。こうした意図を基盤として生まれた新書は、文化史として描くこともできる。しかし本研究が目指すのは、その文化としての側面を持っている「新書」には「モノ」としての一面もあるという点からの検討である。これは、フランスの書物の専門家ロジェ・シャルチエの考え方に敷衍するものだ。

知識の伝達をする新書は、それが「モノ」として書店に並ぶまでに、企画をし、著者から原稿をもらい、印刷にかけて書店に並べるなど、様々な作業がある。さらに、読者たちからの「期待」や流通との都合など様々な要素が絡まっている。これが具体的な意味でモノとして「世に出す」ということである。ある編集者は、自分が担当した本がスケジュール通りに進んでいなかったとき、上司に「原稿は読むな、中身なんてどうでもいい。本をモノとして作れ」と言われたことがあると語った。モノ、つまり商品にするということは、内容をいかに完璧にするのか、という以上に時間という「制限」もあるということだ。したがって、モノに着目をするということは、そこに携わる多くのアクターがそれぞれどのように相互に依存し合っているのか、どのような交渉が繰り広げられているのかといった側面に着目するということでもある。「モノとしての本」と「作品としての本」は二元論では語り得ない。モノとしての本にはその中心部分となるテキスト以外にも「目次」や「あとがき」も含まれる。作品の意味というのはいわゆる「文学性」だけではなく、作品以外のテキストにも依存するとシャルチエは述べている[7]。

未だ西洋の書物史では日本という文化圏の特殊な「新書」を扱った研究はなく、一方、日本においても、新書を日本の「物質文化」として捉えた研究はまだない。ここに本研究が貢献しうる点が

あると考えている。

2. 本の二重性

もうひとつ重要な点は、ブルデューによる本の二重性[8]、つまり商品としての本と、象徴的な意味での本という二つの側面だ。新書が世に出るためには出版社がなければならないが、その出版社は企業体であり、経済事業としてその出版活動を成立させなければならない。しかし、出版活動を一種の「文化事業」として捉えて、それを表明し、社会からもそれが求められているというのも出版社の重要な側面だ。1954年、雑誌出版ニュースは、出版業は「鍋釜や石鹸類の製造業社とは違って、文化事業であり、文化財を生み出す事業である[9]」とし、書物の商品性と文化性を区別している。また、岩波書店の岩波文庫の巻末にあり、実際には三木清によって書かれたと言われている「読書子に寄す」では、その頃流行していた予約出版、円本などの批判をしながら、「生命ある不朽の書」を世に出版することを目指すといいつつも、この出版活動ということに関しては、「その性質上経済的には最も困難多きこの事業」と定義している。

新書は「文化的側面」と「商業的側面」のせめぎ合いという場に置かれている。商品としては「読者が望むもの」そして文化財としては「読者が望むべきもの」とするとわかりやすいだろう。商業出版であればそれはどのようなジャンルの本も多かれ少なかれこの二重性の間にあるのは確かだ。しかし新書の場合は、たとえば学術書よりも明確に商業的側面が強調される。それはベストセラーを狙うことができると同時に「教養」を基盤としていることからもわかるだろう。

3. 目的としての「教養」と手段としての「教養」

シャルチエが述べているように、テキストの意味は歴史と物質という二重のコンテキストによって構築されている[10]。「新書」に着目する上で「教養」という概念とその歴史的背景は外すことができないだろう。教養主義は、「教養書主義」とも捉えられるように、本という媒体と強い関係性を築いてきた歴史がある。長谷川一は「知と出版は独立した二つのシステムとみられるべきではなく、知－出版系とよばれるべき統合されたシステムとして編成されていると見なされなくてはならない[11]」と述べている。新書はまさに、ある種の「知」を可視化する媒体として機能してきた。

明治以降の教養主義は「人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度[12]」や「人格の陶冶」というドイツ語の「ビルドゥング」に近い意味で捉えられることが多い。それは個人の人格の陶冶であり、読書という個人的な行為と結び付けられてきた。しかし、エリート文化として成立した教養主義の時代から、河合栄治郎の学生叢書[13]のようにいわゆる「教養のマニュアル化」などを経る中で、教養はひとつの集団によって同時に認識され、共有されるものとして社会に浸透していったとも言える。社会の大きな動きを生み出し、「教養」は社会を構成する要素のひとつとも言える。たとえば阿部謹也によると、大正時代に旧制高等学校をはじめとしたエリート学生たちは読書を通じて「自己の人格の完成」を考えていた。しかしそれと同時に「学問に基づく教養」を身につけるか、あるいはそうではないかによって上層階層と民衆に分断がなされていったとも述べているのだ[14]。日本の教養という概念は個人的な部分と同時に非常に強い集団性も含んでいる。

そもそも教養という概念は明治時代から存在するが、その定義に関しては、修養との対比を含め、これまでも様々な議論がなされてきた。ここでは詳細は省くが、20世紀初頭の日本のエリート養成校とも言われる「旧制高等学校」では1906年に新渡戸稲造がその第一高の校長に就任したあたりから「教養主義」という言葉が定着していった。「教養」が最初はエリート文化だったのに対し、

「修養」は大衆文化の中核だったと筒井清忠は述べている[15]。しかし「教養」と「修養」の線引きは曖昧であり、この二つの概念は「同質的なもの」として成立したというのは筒井が明らかにした点である。「教養」が必ずしも「エリート階級」の中で生まれた概念ではなかったという見方は、それ以降の日本で「教養」がキーワードになり、「大衆化」していったことへの理解にも繋がる。

では新書においてこの「教養」はいかに捉えられているのだろうか。アメリカの社会学者ハワード・ベッカーはジョージ・ハーバード・ミードの「他者の役割を取得すること」を引きながら、以下のように述べている。

「アーティストは自作を、少なくとも部分的には、自分がすることに他者がどのように感情的・認知的に反応するかを予期しながら、制作するということである。これによって彼らは、すでにオーディエンスの中にある傾向に迎合し、あるいはオーディエンスを新しいもののために訓練しようとすることで、制作をさらに進める手段を得る[16]。」

教養とは、新書の作り手が「オーディエンス」である読者をイメージしながら、それに迎合するものを作り上げていく過程で、その場で定義されると言えるのではないだろうか。新書を作るという実践の場に焦点を当てると、そこには必ずしも明確な規定も定義もなく、曖昧な「教養」というキーワードが共有されることで編集作業が行われている事実が見えてくる。それまでのラインナップや過去の著者のリストを参照することで、ある意味感覚的に構築されているのだ。

さらに今日、書籍と教養の関係性は以前ほど確固たるものでもなくなってきている（インターネットの発達や電子書籍の参入など）[17]。筒井清忠や竹内洋のように、「教養」とはすでに衰退してしまった概念であるという見方もあり、「役に立つ知識」という意味にだんだんと変化してきているとも言える。「教養」は社会の「目的」だった時代から、教育のマス化や大衆メディアの誕生などを経る中で、より広くなったオーディエンスを惹きつけるための「手段」として利用されるようになったとも言えるかもしれない。今日に至ってもなお、「教養」を基盤とした新書づくりは継続されているが、その根底には「教養」という概念が読者層を掴むための手段として機能しているとも考えられる。

こうして新書は1938年に刊行されて以来、少しずつ性質を変えてきた。まさに、「あらゆるメディアは自らを細分化しつつ、人々の関心を細分化してゆく[18]」ということだ。この観点に立つと、「（ジャンルが）多様化する新書」ではなく人々の関心事を細分化し、自らも細分化した新書として捉えることが可能になる。

しかし、浮き沈みがありながらも今日まで一貫した「コレクション」として生き延びてきたという側面もまた事実である。ではいかにして新書は生き延びてきたのか。ここではいくつかの観点を提示する。

4.「本」として生き残る方法① わかりやすさ

なぜ今日まで新書は生き延びたのかという点を解明するためには、「文化対商業」というジレンマに対してどのような対応策が取られてきたのかという点を探る必要がある。また、上述したフランスのク・セ・ジュ文庫のように、世界各国には「本」が存在し、出版社や編集者が同じように存在している。しかしながら、そこで生み出される「モノ＝本」の生産過程は同様ではない。

日本の新書が今日まで生き延びてきた理由のひとつを「わかりやすさの探求」から考えてみると興味深い。これは誰にとってわかりやすいのか、またなんのためにわかりやすく書くのか、など様々な問題を提起するが、実は新書の歴史を振り

返ると、「わかりやすさ」は新書の大きな目的のひとつだったことが見えてくる。

1954年の出版ニュースは特集「読者の発言をめぐって」という中で「書物は大衆を無視して勝手に作っているか」という問題を提起している[19]。美作太郎は、確かにもらった原稿は「なんでもすぐそのまま出版することになる」と明言し、最近では「著者と出版社が一緒になって作り上げたようなものも見受けられ」るとしつつもまだ例外だと述べている。最初の新書を創刊した岩波書店も「わかりやすさ」という叙述の問題は創刊時からあったことを鹿野政直が以下のように指摘している。

「本の性格上、新書は「やさしく」また「わかりやすく」書くことを求められる。だが、「やさしく」また「わかりやすく」書くとは、どういうことか。その問題は、「いかに」そうするかという技術的な次元に収斂されがちだが、書く主体として、そもそもそのように文体を場合に応じて変えられるのかどうか。変えられるとして、「やさしく」書く場合、想定する読者への視線に何らかの変化が生じないだろうか。新書の誕生は、おそらくそのような文体の問題をも提起した[20]。」

わかりやすく書くということは「難しい」問題である。文章を明確なものにする、あるいは誤字脱字をなくすという基本的な、あるいは技術的な問題にはとどまらない。それは本の構成や、専門用語の有無、注釈の付け方など、ページをめくる者にとっていかに「やさしいか」が問われる。

フィールドワークから得た知見として挙げられるのは、「わかりやすさ」を作る過程はあらゆるアクターの相互作用から形成されているということだ。著者が唯一、テキストを生み出す主体なのではなく、編集者との「共同作業」によって生まれる。また、様々な職業がアクターとして関わる中で、分業の境界線は事前に引かれているものではないということも示唆している。

5.「本」として生き残る方法② 時間との戦い

佐藤郁哉らは、2000年前後から新書レーベルが激増傾向にあり、2003年にはベストセラーとなった『バカの壁』で採用された語り下ろしという作り方が一般化し始め、さらにはページ数や文字数が減って薄いタイプの新書が増えたということを踏まえ、新しいタイプの教養新書を「ファスト新書」と呼んでいる[21]。

調査を進めている中で、このスピード感に関しては編集者たちの多くが意識をしている点であることも判明しつつある。

本を一冊作るために必要な時間が、他媒体（特にインターネット）の急速な発展に影響を受け、スピードを増している。紙の本の市場規模が縮小しつつあるということは事実のひとつだが、その変化がいかに生産過程や仕事の内容に影響を及ぼしているのかという点を具体的に検討することも重要だろう。本の時間の流れと他媒体の時間の流れの差が縮まってきていることにより、編集を含む本作りに関わる様々な仕事が変化せざるを得なくなってきている。

しかし実はすでに岩波新書の創刊時から、素早く本を世に出すべきだという意識はあったようだ。新書の創刊にあたって岩波茂雄は「（新書は）寿命はあまり長くなくて良い」とし、また、「生き生きした問題を摑える[22]」ことをプライオリティとして掲げていた。

新書も本の市場全体が衰退しつつある中で、スピード重視をすることで生き延びるための解決策を探っているという見方がある一方で、このような変化を経た今日において、「スピード感」という、実は昔からある新書のアイデンティティの一部がより重要性を増してきている、という見方もできる。

今日の新書の特徴である「スピード重視」と「わ

かりやすさ」は、実は今と昔の新書の断絶を表しているのではなく、継続性を示していると捉えることができるのではないだろうか。新書の生産プロセスに着目することは、文化と商業という間でまさに揺れ動く新書の定義に加えて、それがなぜここまでひとつのモノとして存在し続けてきたのかという問いに答える一端となるはずだ。

6. デジタル化がもたらすものとは

書籍の市場が危機的な状況にあるということに加えて、「モノ」としての本の存在は「電子書籍」の出現によって大きく揺るがされているということも今の時代の大きな特徴の一つだ。デジタル化によって「モノ」としての本はどうなっていくのか。

書物はそもそも書棚に入らなければならないし、値段もそこそこでなければ、ある程度の読者数は獲得できない。それに対し、ウィキペディアなどにはそのような制限がない。ネットと書物には違いがたくさんあり、デジタルと活字は二項対立的に語られることが多い。しかし根底にある欲望は共通しているとも言えるのではないだろうか。

新書の生産過程から書店までの一連の流れを追っていくと、実は新書も他メディアがあるからこそ成り立っているという側面が見えてくる。例えば編集者が新しい新書の企画を考えるときに、アイディアを探すのはSNSやテレビ番組だ。また、ある出版社はZoomを利用し、新刊書の著者と編集者が対談を実施し、発信をするという試みを行った。こうして様々な側面で活字以外の多様なメディアを駆使して出来上がっているのが今の新書だとすると、ネットと活字の間には断絶ではなく連続性を見出す方が今後の新しい可能性への道も広がるのではないだろうか。

本稿では、「新書」をモノとして捉えることについて検討した。そして歴史的な視座も加え、現代の新書の特徴を再検討するための視点を提案した。本研究では、現代の新書作りに携わる編集者へのインタビュー調査や「新書」という「モノ」そのものの分析を通し、著者と編集者の「共同作業」という側面を明らかにすることを目指している。それは、いわゆるフーコーが述べた「作家性」やその機能を改めて検討することにも繋がると考えているが、それは今後の課題としたい。

注

1　登張信一郎「読書と修養」、国光社、1904年、pp.143-144
2　竹内洋「教養主義の没落」、中央公論新社、2014年
3　出版指標年報には新書における平均頁数の統計がある。それによると、2010年から2019年の平均はおよそ225ページである。
4　出版月報「［特集］教養新書 市場激変の10年」2009年6月号、51(7)、pp.4-11
5　吉田昭「大学図書館と新書本」大学図書館研究、1991年38巻、pp.60-66
6　出版年鑑編集部編、「2018年版出版年鑑」、出版ニュース社、pp.266-267
7　Chartier Roger. *La main de l'auteur et l'esprit de l'imprimeur*, Paris, Gallimard, coll. Folio Histoire, 2015, p.143
8　Bourdieu Pierre. *Une révolution conservatrice dans l'édition*. In: Actes de la recherche en sciences sociales. Vol. 126-127, mars 1999. Édition, Éditeurs (1) pp. 3-28.
9　日本出版ニュース「事業としての出版文化の内側 今日の問題研究会（B）」、1954年2月下旬号、p.2
10　Chartier Roger. *La main de l'auteur et l'esprit de l'imprimeur*, Paris, Gallimard, coll. Folio Histoire, 2015, p.143
11　長谷川一「出版と知のメディア論」、みすず書房、2003年、p.18
12　竹内洋「教養主義の没落」、中央公論新社、2014年
13　日本評論社より1936年から1941年まで刊行された叢書。
14　阿部謹也「「教養」とは何か」、講談社現代新書、1997年
15　筒井清忠「日本型「教養」の運命――歴史社会学的考察」、岩波書店、1995 年
16　ハワード・ベッカー「アートワールド」、慶應義塾大学出版会、2016年、p.218
17　佐藤卓己「書物がメディアになるとき：メディ

ア史からの視点」情報の科学と技術62巻6号、230～235（2012）
18　佐藤卓己「テレビ的教養　一億総博知化への系譜」、NTT出版、p.272
19　出版ニュース「読者の発言をめぐって」1954年12月上旬号、pp.1-2
20　鹿野政直「岩波新書の歴史」、岩波書店、2006年、pp.22-23
21　佐藤郁哉他「本を生み出す力」、新曜社、2011 年、pp.409-410
22　鹿野政直「岩波新書の歴史」、岩波書店、2006年、p.4